

お断りみたいなことを女性の側から言われるとすれば、「じゃあ、ご自分で、どうぞ実行してください」という気にはやっぱりなりますよね。…そんなにイメージを持たなくてもいいんじゃないか。イメージが先行しているような感じがするんですよ…。」(男性)

また、対等な関係というイメージもしっくり来ないようである。

「…対等であればあるほど結婚することに対する意味というのは、…ますます乗り出すという感じが失せるというか、薄くなるというのは正直な印象ですね。」(男性)

このように、男女の間には、まず、イメージを持つかどうかの違いがあった。男性の方がイメージを持っていない、というのは、男性は（少なくとも今までは）あれこれ考えずに結婚しても、大して変わらないという事実があったが、女性は、結婚相手で自分の人生が決まる、という事があり、考えて計画しないことには、相手の犠牲になってしまう、そして、自分の親の世代の結婚の繰り返しになってしまうので、かなり明確な考えを持っているのだ、との解釈もできよう。

今回インタビューした男性は20代の1グループのみなので、集まった人の特徴であるという可能性は否定できないが、女性の方がパートナーシップを求めるのに対し、男性はイメージを持たないながらも、女性も持っているイメージにはあまり肯定的でないようであった。このような男女間のギャップは、結婚の回避でなく、結婚しにくい状況に貢献していると言えよう。

### C. 結婚しないことのコスト感の減少

次に、現時点で結婚していない状況に貢献していると考えられる、意識と結婚コスト感について見てみる。どんな意識やコスト感が、結婚しないことに影響しているのだろうか。まず、結婚すること自体のコスト感を検討する前に、「結婚しないことのコスト」を成す「結婚メリットの減少」「結婚しないでいることのコストの減少」「結婚へのプレッシャーの緩和」についてどのような経験をしているのか、どのように考えているのかをまとめる。

#### 1. (従来の) 結婚のメリットの減少

女性も男性も、従来は結婚するメリットとして捉えられていたものが、結婚によって保障されなくなったことを認識している。つまり、女性にとっては、自分が働かなくても経済的不安がないこと、男性にとっては、身の回りの世話をしてくれる人ができること、というメリットを得るチャンスが減少している、と観察している。

25歳の女性は、経済的な保障がないのだったら、それかきっかけで結婚、ということはある得ないことを意味することを言っている。

「私の子どもの時のイメージは、結婚したら仕事を辞めて、よく永久就職とか言うじゃないですか。だから、もう仕事をしなくていいみたいな頭があったんですけど、一緒に働いていたパートの人たちが、私、今、フリーターなんですけれど、フリーター同様に、生活費を稼がなくてはいけないという、実家じゃないんですけれどね。だんなさんとアパートで暮らしていたので、生活の足しにしなければ、すごい一生懸命働いていて、そう思ったら、結婚してもやっぱり働かなきゃいけないんだって思って。」(25歳)

同様に、「専業主婦」の可能性を考えても、30代女性の数人は、結婚イコール経済的不

安からの解消、という「メリット」は全くない、と感じている。

「生活の心配は最近あるんですよね。専業主婦で、いきなりリストラをされちゃうと。あるんですよ、本当に。奥さんがかわいそうという人は結構いますよね。専業主婦も安全パイじゃないなって、最近。結構これは宝くじに似たものがあるなという感じはちょっとある。」

(32歳)

「右肩上がりだった時代はよかったですけれども、これからは、やっぱりリスク負担を夫婦で持たないと、ヤバイんじゃないかという…。」(38歳)

男性からも、結婚しても「家事をしてもらえる」というメリットがあるとは限らない、それだったら、わざわざ結婚しなくても、と言うことを意味する発言があった。

「自立して女性が働いているのなら、別に結婚をしなくてもいいとまでは言わないけれども、…結婚する意味というのですか、…メリットというのは、ますます。一緒に暮らすから、…例えば女性のほうが家事を引き受けるからメリットがあるという、そういうことじゃないにしても、対等であればあるほど結婚することに対する意味というのは、…ますます乗り出すという感じが失せるというか、薄くなるというのは正直な印象ですね。」(男性)

このように、男女とも、従来結婚のメリットとされていたことが保障されなくなったと認識しており、それが結婚への意欲を下げていていると考えられる。それを得たい、それが得られるのなら結婚する、と意識的には考えないが、それを得られないことが間接的に「(他に魅力がないのだったら)わざわざ結婚することもない」ということで、結婚回避の要因になっている可能性もある。

## 2. 結婚しないことのコストの減少

特に首都圏の女性は、自分の親の世代は、「結婚しないことのコスト」が高く、多くの場合、結婚を積極的に選択していたのではなく、仕方がなく結婚していたこと、そして、今の自分たちは、経済的な自立が可能で、選択の余地がなく結婚するはめになることから開放されている、と認識している。

「やっぱり経済的な問題があるだろうし。…意識的には、あまり昔も今も変わっていないと思うんですよ。好きな人と結婚をしたいと。でも、昔は、25になっても結婚をしていないと、これから1人で暮らしていけないから、「あんた、お見合して結婚しなさい」と言われて、じゃあ、まあいいだろうということで結婚をした。今は、とりあえず25で結婚をしていなくても、これからはばくく食べていけるし、仕事もあると。ほかの可能性もあるからというのもあると思うんです。」(32歳)

「昔は生活のために結婚せざるを得なかった。お見合して。でも、今は別に、自分で生活できるんだから、そんな意識レベルの低い人と何で結婚しなきゃいけないんだみたいなのはありますよね。」(33歳)

また、現在両親と同居しているから、経済的にも楽だから結婚を考えないのでは、との問いかけに、27歳の女性は、ひとりでも何とかやって行くことができるので、そういうことはあまりない、と答えている。

「…自分で家を出て、…貯金さえしなければ何とか食べていけるだけはいけるかなっていう程度、今、収入があるので。だから、「文句があるなら出てってやるよ」っていうような強気な態度、今ある状態なので」(27歳)

男性からも、結婚していないことで、日常生活上困っている、ということは聞かれなかった。これは、一人暮らしの場合は、ある程度自分で家事やっていることもあるだろう。

女性からみても、独身男性は、外食産業やコンビニなどの普及でなんとかやっけて行かれるので、結婚の必要性がない、とのことである。

「例えば、役職で昇格する時に信用が得られないから、おまえもそろそろ身を固めてとかって、…結婚をすとか、実際に好きな人がいて結婚するという場合もありますし。ただ、物理的には昔ほど男性も不便を感じていないし。」(33歳)

「同じぐらいの年代の独身男性で、…仕事に不満はなくて、もっと仕事を一所懸命やりたくて、…外食は今あるし、コンビニはあるし、コインランドリーはあるし。男性側も便利になっちゃったから、男性が結婚しなくてはいけないという切羽詰まった状況になるって。」(32歳)

実際に、彼女の勤める会社では、独身男性が駐在員として海外に行くと、日本にあるようなコンビニもなく、洗濯、掃除も一人でやらなくてはならない状況に追い込まれるため、日本にお見合い帰国し、何度か会って結婚しているケースも多くあるとのことである。彼女は、男性の結婚について、鋭い分析をしている。

「…コンビニとか、吉野家とか、そういうのと同じに女の人を考えるのも困るんですけど、でも、そういうのってすごく、胃袋というのは大きいところみたいで、それを機に結婚する人がすごく多かったですよ。」

「…どこかの要因が1個大きくなると、結婚しようかなと思うんじゃないかなと思うんですよ。そういう5つくらいある中で、ご飯とか洗濯とか、そういうところが、「ああ、やっぱりこれは困るな」って大きくなると、じゃあ、その理由だけでも結婚できるかなというのはあって。あと、普通に何となく生活していると、安らぎも欲しいし、何かやってくれる人も欲しいし、一緒に何かやる人も欲しいしというような気持ちはあっても、でも、うまく適合する人がいなければ、1人でもいいのかなというふうに思うのかもしれないですね。」(32歳)

このように、女性は、男女とも結婚しないでのいる事のコストが減少している、と認識し、同時に、従来は、選択の余地がなく結婚に追い込まれていた、と見ているのである。

### 3. 結婚のプレッシャーの緩和

結婚しないのか、としょっちゅう問われたり、結婚していないことで、いやなことを言われるなどの、結婚へのプレッシャーも「結婚しないことのコスト」と考えることができるが、それについてはどのような経験をしているのだろうか。

30代後半の女性は数年前まではかなりのプレッシャーを受けており、定期的にお見合いをする、ということでも対処していたようだ。

「…31、2、3…その頃がたぶんピークだったと思うんですが。その頃やっぱり、しょうがなくしてお見合をしたりとか。その前から、ちょっとインターバルを置いてお見合をすとかというのは、一応姿勢としては見せておこうみたいな感じでやっていました。」(38歳)

古い家の娘である、という30代前半の女性も同様にプレッシャーを受けている。

「父は、普通の定年を過ぎても頑張って勤め続けていて、最近辞めるんですけども。理由

は、兄がいて兄は結婚をしたんですけれども、私が1人残っていて、嫁の披露宴に自分が無職だったら体裁が悪いという意識が相当あったみたいで、さすがに私がもう、ずっとこんな状態なので、自分の体力と相談して…。最近、私の年齢的なこともあって、もう恋愛なんかどうでもいいから見合いにきなさいと言っていますけれども。やっぱり田舎なので、富山県での見合いの話はありますけれども、私は、今まで東京でやってきたことを全部リセットしなきゃいけないというがあるので、ちょっとそれは断っているんですけれども。」(31)

中には、24, 5歳でプレッシャーを受けている人もいる。

「…地方と東京って分けるのはおかしいかもしれないけれど、…明らかに目を向けているものが全然違うんですよ、やっぱり。田舎なんですけれど、田舎だと、私、25で、「まだ結婚してないの」みたいなものがあるんですよ、もう。」(25歳)

「うちでは、24, 5までは結構、「しないの、しないの」という感じだったんだけど、最近はそのことに触れないというか、あえて避けて通るみたいなのがあって、あまり言わないですね…。…おばあちゃんは…「ひ孫、見たいな」とか。あと、近所のちっちゃい子とかと遊んでいて、「きょうは誰々ちゃんがね」とかいう無言のプレッシャーをかけてきたりとかしますけれど、ズバリ「結婚しなさい」とは言わないですね。」(27歳)

職場でプレッシャーを感じている人もおり、25歳の彼女は、毎日のように結婚が話題になるとのことである。

「…私の職場というのが、だいたい40過ぎぐらいのおじさんとおばさんが8人ぐらいいるんです。中には、そんなに若くないんですけれど、若いのが1人なんです。その中で、やっぱり結婚の話というのは毎日出るんですけれど。していないのが私だけなので、出るんですけれど。ただ、最初はすごい嫌だったんですけれど、その中の1人のおじさんが、「やっぱり人として生まれてきて、何のために生きてるんだ」とかって言われたんですよ。結婚するのが全部じゃないんですけれど、結婚したら子どもを産んどとか、子孫を残すとかという話をするんですね。そんなこと考えたことなかったんで、「それはそれで、そうだな」とかって思っちゃったことがちょっとあって、「結婚しなくちゃいけないのかな」とかっていう気になって、それからちょっと義務みたいなイメージがすごくあります、自分の中では。」(25歳)

一方、直接のプレッシャーを受けていない人、または感じていない人もいる。

「私は、弟が1人で、弟は、もう結婚していて、子どもが3人いるんです。実家の近くに住んでいて、しょっちゅう来ているので。親はもう、孫がいるというので、私に対するプレッシャーは少なくなっているんですよ。ないですね。私の将来は、親なりには心配しているみたいですけれど、何も言わないですね。」(30歳)

「うちもそうかもしれない。結婚しないのかな、なんて思っているんでしょうけれど、もう怖くて口に出せない。ただ、私もずっと、海外へ行ったりして勝手に自分でやって、それなりに暮らしてきているので、別にそういう点では、この先どうするのかなというのはあるんでしょうけれども、とりあえず自分でやっているなというがあるので、あまり口を出してもしょうがないかなというふうには思っているとは思っていますけれども。」(32歳)

「うちの父は何も言いませんけれど、うちの母が、結婚しても相手の家族とやっていくの面倒くさいから、結婚しなくてもいいんじゃない。自分勝手な親なんです。結婚をしちゃうと面倒くさいので、あっちの親とか付き合いがあると。だから、結婚しなくてもいいんじゃないって。その分、プレッシャーがなくてすごい楽ですけれどもね。」(33歳)

「(父親は)俺は世話をしてやらないので、おまえが見つけてきて、行けるものなら行ってみるみたい。周りからしてみると、それは親が放さないみたいなんですけれど、でも、行きたいと言えば、行ってくればと言うと思うんですよ。別に結婚していないからどうとかはない

ですね。親戚とかからは、「早く結婚しないと、結婚式に出られないよ」というのは言われるんですよ。「死んじゃうから、早く結婚して」とか…「結婚式に出たことないから、出てみたいから結婚してよ」とか、そういう感じでは言われますけれど、「何で結婚しないの」とか…「すれば」とかはないですね。」(27歳)

このように、結婚あるいは結婚して子どもを持つことに対する社会からのプレッシャーを経験しているかどうかには個人差がみられるが、プレッシャーがある場合でも、女性は本人が経済的に自活できる能力がある場合は、プレッシャーが直接、結婚意欲をかきたてることはないようである。この点が、プレッシャーもあり、かつ女性が経済的に生活していく糧を得ることのできなかつた時代との大きな違いであろう。

## D. 結婚コスト感

上記 C では、結婚しないでいることのコストが下がったことを見てきた。ここでは、結婚そのもののコストがどう捉えられているか、コスト感がどのような意識によって支えられているのか、それが結婚回避にどう結びついているのかを見てみる。主なものとして、自由がなくなる、自己実現ができなくなるというコスト感、親の介護という負担感、家計を支える、とう負担感、家事を分担する、という負担感が挙げられた。

### 1. 自由がなくなる、というコスト

自由でいたい(意識) +  
結婚によってそれが失われる・家族への責任が出てくる(コスト感) => 結婚回避

男性の中には、自由でいたい、家族という責任から逃れたいと考えるが、結婚によってそれが失われるので「積極的にしたい」とは思わない、という人がいる。

「結婚すると、やっぱり家族単位というのですかね。そういうことで考えなきゃいけない。そうすると、やっぱり責任が重くなったりとか、何かを選んだりする場合でも、家族のことも考えなきゃいけなくなったりとか、そういうふうになって、子どもが育つにしても、育てるのが、これからもっともっと大変になってくるのではないかと思うので、そういうことを考えると、自分から積極的に(結婚)したいというような印象はあまりないですね。」(男性)

女性から見ても、独身男性は、自由であるようだ。

「…結婚をしなかったら、結構自由ですからね。土日、ゴルフ三昧とか、お金も自由に使えるとか、そういったメリットだって男の人にはいっぱいあるわけだしね。だから、別に子どもが好きじゃなかったら子どもの世話もしなくてもいいし…」(33歳)

### 2. 自己実現・自分の生き方を失う、というコスト

自己実現・自分の生き方が大切(価値意識) +  
結婚によってその機会が失われる(コスト感) => 結婚回避

女性の方は、自由がなくなる、というよりも、自己実現の追求ができなくなることを懸念している。それが、今結婚していないことにも貢献しているようである。

「…仕事をしてきて、まだまだ自分の可能性があると思っているところがあって、結婚でそれがなくなることじゃないでしょうけれど、まだまだ自分で、可能性を試すというのじ

やないですけど、生きていきたいというところがあって、今はたぶん結婚には踏み切れないと思っているんですよ。この仕事をもうちょっと続けていって、もう十分やったかなと思えたら、きっと結婚に踏み切れると思うんですけど。それで別に辞めることになっても構わないと思っているんですけども。」(30歳)

「…自分がまず一人の人間として目標と到達するとか、自分に自信が持てるというか、そうなるから私は結婚したいと思っています… その目標というのは、ある仕事に就けて、自分に人としての誇りが持ててからでないという、…そういうのがあって、結婚は、その後、誰かいい人がいればいずれはという感じで、自分が主体という感じです。…特に特技もない私が仕事ができないで専業主婦かなと思うと、専業主婦も立派な仕事だとは思いますが、自分は何なんだろうって思いそうな気がして。」(鶴岡 27歳)

希望する職種によっては、男性でも、結婚して家庭を持つことで、自分のやりたい仕事を追求できなくなるので、結婚しないと言う人もいます。

「…両立が難しいあれなんです。音楽のほうで結婚している人を見ても、子どもを持ちながらやるというのは、もちろんいるんですけども、そういう人も。ただ、普通の仕事を持ちながら子どもを持つのとちょっと違う感じなんです。僕もそこまでは詳しくは分からないんですけども。両立しにくいというのが大きな問題ですね。」(男性)

女性達がこのように考えるのは、やはり現在の結婚が相変わらず女性（あるいはかなりの野心を持つ男性）の人生を犠牲にしていることを見ているからだろう。（周りの人の結婚のあり方が、結婚に対する考えにどう影響しているかについては、次章「E」を参照。）結婚してしまうと、自分のやりたいことができなくなるという不安、あるいは結婚前にしっかりと身を立てておけば、結婚してもなんとかそれを続けていけるだろう、という希望から、まずは自己実現を優先しているのである。

### 3. 親の面倒をみる、という負担感（コスト感=>結婚回避）

男女とも、自分の親の面倒をみることを視野にいれている様子である。また、女性は、結婚によって、相手の親の面倒をみることを期待されているとも認識している。しかし、女性側の親も一緒にみましよう、という意識の高い男性がいないことを、女性は問題視している。

「結婚をしたら自分の親の面倒をみてくれて男の人は思っているから…一緒になって、両方の家族をみていこうなんていう意識の高い人はあまりいないと思うんですけども。」(33歳)

過去に実際に結婚話があったが、それを進めなかったきっかけが相手の親の面倒の問題だったと言う女性もいる。彼女の場合は、介護の負担、というコストが、直接結婚行動（結婚回避）に影響を与えたのである。

「30何歳だったか忘れたんですけど、結婚しようかどうか迷った時があったんですが、結果やっぱりちょっと踏み切れなかった最大の理由は、土壇場になって相手の方の真意が見えちゃったというか、結婚というと家と家がありますよね。相手の方のご両親の面倒をというのが直面する問題としてあったりし、…これはちょっと違うという感じがして、いろいろ考えて保留にしている間に消えまして。」(38歳)

女性は、結婚を考える時、自分の親と相手の親をどのように面倒みるのか、という不安も語る。

「私は、姉と妹だと、姉は孫を正常に貢献していて、(自分は) 老後の面倒をみる担当みたいな、なんとなく。…そういう分担ができてきつつあるので、そこにどういってお婿さんが来るんだみたいな。過去やったグループインタビューお見合いでも、結構、同じケースの男性をやっても、悩みが一緒ですねとかいって終わっちゃう。結構ありますよね、そういうの。自分の両親のことはちゃんと見たいし、そこを組み合わせるといふ難しさがあるという。」(38歳)

「…両方を見るのは難しいですものね。自分の親をみるだけでも大変なのに、相手の親も見たいなのは、やっぱり不可能に近いと思うんですよ。親もよくないんだよね。親も子どもに面倒をみてもらうなんていう甘い考えを持っているから。それはやっぱり親もよくないなってすごく思うんだけど。自分の面倒は自分でみたほうがという。でも、親だから言えないしね。病気になって介護しなきゃいけなくなったら、やっぱり自分の親ですから、それはしなきゃいけないと思うし、そこは難しいですね。」(32歳)

男性の方は、自分の親の面倒についてだけ、考えている。

「…今、両親と祖母と同居なんですけれど、両親は、もう定年で70近くて、祖母は、実は血がつながっていないんですけれど、祖母は80近いので。ただ、体は健康ではないんですけれども、奇跡的に病気をしていない状況なんですけれども、1人病気をすると、介護をする人が、また病気になっちゃったりして大変な状況になるので、そこで結婚をするというのは、確かに自分が仕事に行って、みてくれる人がいたらいいと思うんですけれども、その人も、もちろん養わなくてはならないですし、だから、結婚の動機にはプラスはほとんどないです。」(男性)

「(結婚後は) 親も、出て行ってほしいという、変な意味ではなくて、一緒に住むのはスペース的にも多少厳しいし、一緒に住むのは嫌だという話をしているけれども、介護の問題がありますよね。だから、出て行けと言いつつ、出ていく経済力があつたとしても、一緒に住むことになるのではないのでしょうか。」(男性)

「やっぱり(親は自分の面倒を誰が見るかということが) 不安は不安みたいですね。言葉の端々で。誰が面倒をみるとか、3人兄弟で。うち、3人兄弟で、弟と妹がいるんですけれど、兄弟のなすりつけ合いが始まっていますから。」(男性)

女性達が認識しているとおおり、男性は、結婚してもしなくても、自分の親のことは視野に入れているが、結婚した場合、女性の親の面倒はどうするか、ということは考えていない。今後ますますこの辺のギャップも問題になってくるのではないだろうか。32歳の女性の「(自分の親の面倒についても気にかけている) 女性の意識に、男性はあまりついてきていないのかもしれないね。」という言葉が印象的である。これは、個人の男女間の問題だけではなく、女性にケア役割を押しつけてきた今までの社会のありかたが問題の原点であろう。

#### 4. 家計を支える、という負担感

身を立ててから結婚、というライフコースに忠実(意識) +

結婚すると家計の負担が厳しい(コスト感)

=> 身を立てるまでは結婚を考えられない(結婚回避)

男性は「身を立ててから」でないと結婚は考えないようである。見聞きした結婚生活の様子から、結婚すると家計が厳しいことを知り、さらに今の日本の経済状態により、将来

に対する不安は募る一方で、結婚などはとても考えられないとのことである。学校を卒業後、就職すれば、安定した生活が待っている時代は去り、リストラなどが直面している今は、かなり厳しい状況であると認識している。

「自分の将来が全く真っ暗闇というか、暗闇の中を船で行く、海のものとも山のものとも。10年たったら全然違う仕事をしているかもしれないし、そういうことを考えると、自分の本当に正直なイメージとしては、自分のことで手一杯だから、結婚だの子どもだのというのは、そこから先。もし、何か時期が来て、安定というのですか、ある程度職業も安定して、このままこんな調子でやっていけるかなぐらいの見通しが立てば、じゃあ、その時点で結婚なり子どもなりというのも、別にそれはあっても全然いいし。…」(男性)

「…苦戦している人のほうが目につきますね、やっぱり。出向先が、もう工場がなくなっちゃいそうとか。その出向先の工場ごと全部なくなって、自動的にリストラされそうとかというようなことも聞くと、ますます、自分一人で何とか世渡りしていかなくちゃいけないこのご時世で、結婚とかというのは、それは後回しかなというようなことは感じますね。」(男性)

「これで食っていけるというのが身に付かないと、とても結婚を考える気にならない。だいたい30半ばぐらいまでには、とりあえずこれで何とか食っていけるぞというネタみたいなものを持っていないと、あとは会社とか組織に振り回されていくだけです。あと10年ぐらいいしかならないですね。今まで積んできたものをベースにして、そこに更にあと10年積み上げをして、それで食っていけるようにしないと、とてもじゃないですけど。あとはバサバサ切られていく側に回っちゃうだけだから。」(男性)

「子どもがなければそうでもないかもしれないですけども、ただ、奥さんが働いていないと、この年だと食べていけないというのがありますし、子どもなんかできちゃったら、自分一人の給料じゃ、満足に養っていけない。…子どもは、すごいお金食うし、夫婦2人でも、会社の給料のあれにもよるんでしょうけれども、年収やっぱり4、5百万ぐらいが、だいたいこの年代だと相場ぐらいだと思うんですけども、その給料だと2人はなかなか、働かずに一緒に暮らしていくというのは、特に東京近県だと難しい、家賃とか生活費とかを考えると。それを見ると、ちょっと。」(男性)

このように、男性は、結婚することによって、経済的な責任を負おう、と考えるため、とにかく身を立てないことには、結婚や、まして子どもなど考えられないのである。また、今の不況も、かなり厳しく感じ取っている。

男が家計を支え、女性が家の中を守るという結婚のモデルはすこしづつ崩れており、仮に、そのモデルに従いたくても、経済状況が許さず、1人の収入で家族を支えていくことが不可能になりつつある。その一方で、例えば、まずは気の合うパートナーを見つけ、その後、経済的安定を含めて、カップルとして生活を築いていこう、という感じでもない。つまり、新しい結婚関係の形も、確立されていないのである。そのような無規範の状態も、男女が結婚に積極的にならない理由のひとつと言えるだろう。

## 5. (男性が感じる) 家事を分担する、という負担感

男性の場合：(男性が認識する) 女性の家事分担についての意識 +  
結婚によって、女性から半々を求められる (との懸念) (コスト感)  
=> 結婚回避

女性の場合：家事分担についての意識 (全部自分がやるという人はいないが半々は求めている) +  
男性があまりやらない、という観察はしているが、  
家事自体をそれほど負担に感じていない (コスト感はそれほどつよくない)  
=> 結婚回避にはつながっていない



女性が結婚しないのは、結婚によって、自分の家事負担が増えることをいやがっているのだ、あるいは、親の所に住み、母親に任せている現状を変えたくないで結婚しないのではないか、ということも言われるが、このインタビューでみられた家事分担の負担感と結婚コスト感の関係は、そのような単純な関係ではなかった。女性の方は特に家事の負担は語らず、むしろ、男性の方が、結婚によって女性から家事を半々にすることを期待されていると認識し、コスト感を高めているようである。

まず、男性について見てみよう。男性は、家事をやりたくない、とは言わなかったが、結婚によって、女性側から分担を強いられることに抵抗があるようである。

「…別に五分五分にするのはいいんですけど、五分五分じゃなきゃ決めてる人は嫌ですね。男がやるとか女がやるとか、そういうのも、逆も嫌ですけどもね。そういう決めつけも嫌なんですけれども。とにかく決められているのは嫌ですね。こうじゃなきゃって。」(男性)

「…世の中は、今、分担するという、そういう雰囲気があるじゃないですか。ほかの人と一緒にの価値観で来られるのが、何でほかの人と合わせなければいけないんだと。その家に持ち込まれる、そのまま持ち込まれる。もちろん、関係あるとは思いますが、そのまま持ち込もうとするのが、やっぱり嫌ですね。何で同じじゃなきゃいけないんだろうって。一応囲いがあるから、独立じゃないですけども。」(男性)

また、五分五分に家事を分担することが期待されるのなら、女性には経済的に自立して欲しい、と考えている人もいる。

「家事が五分五分はいいんですけど、それなら、経済的に完全に自立してくれている人というのが条件になりますね。」(男性)

このように、彼らは、結婚すると家事を半々に分担することを期待されている、と認識しており、そのように決め付けられることに反発を感じているようである。これは、結婚関係を定義するにあたって、女性に主導権を握られることへの抵抗感とも言えるだろう。

では、女性の方は家事分担についてどう考えているのだろうか。実際に女性の声を聞いてみると、確かに、家事を自分が全部引き受ける、と考えている人はいない。しかし、逆に、自分が勤める場合でも、家事分担は半々にすべきである、とも思っていない。「大変だということがわかっていればいい」「あふれているな、と思ったときにできるところをやってくれれば」「その時に応じて話し合いができれば」「半々とやるとかえってストレスになる」というように、ある意味では、男性の現状をかなり理解し、要求レベルは決して高くない。

結婚の予定のある 20 代女性はこう語る。

「洗濯とか何かやれるものは、家にいる人がやってというのはあると思います、私の場合は。私がやらなきゃいけないということはないと思うので。料理はちょっと、向こうもちょっと無理だと思うので、両方お互いができるものであれば協力はしてもらいたいとは思っているので、私が全部やるということは思っていない。」(25 歳)

また、結婚した相手に家事をやってもらえるようにする方法を考えている人もいる。し

かし、それも、全部自分がやらず、ある程度は手伝ってもらえるようにするためのもので、半々にするのはかけ離れている。

「…大事にされますものね、男の子はね。だって、絶対、息子として生まれたら、やっぱり母親なり、父親は別でしょうけれど、母親が、「ああ、何々ちゃん、いい子ね、いい子ね」って育ててきて、結婚したら、また、奥様が「あなた、あなた」ってやってやるわけじゃないですか。男の人は全然変わらないですよ。女の人は、それまでの生活にもよりますけれど、一緒にやっていればそんなにないですけど、もし、結構親にやってもらっている人がいれば、それを全部自分がやらなくちゃいけないわけですから、やっぱりその差が大きいかなと。だから、やっぱり2人一緒にスタートだから、先に分けちゃう。最初の1週間でポイント。ちゃんと区別をしなきゃだめだなという気はします。」(25歳)

実際に、男性と暮らした経験から、自分がほとんどの家事をやるような結婚はしたくない、と言う女性もいる。

「私、一回、一緒に住んだ経験があるんですけど、相手の人もちっちゃい時に育った環境で、父親が食事を作らない人だったから、その相手の人も、男は食事は作らないものだという考えがあって、私は、働いて帰ってくると、お米を炊いてぐらいは手伝ってくれるんですけど、あとはやらないんですよ、やっぱり。女の人がやるものって思われていて、私は、それで合わなかったんで、自分は家事も一緒にやってくれる。料理を作ることが好きだという男の人が理想ですね。」(25歳)

中には、自分の好きでないところを手伝って欲しいと思っている人もいる。

「…自分は絶対アイロンがけできないとか、掃除とアイロンがけがすごい嫌なんです。だから、それだけはやってくれる人がいいとか。男の人、アイロンがけ好きな人、結構多いじゃないですか。あとは自分で、ちゃんとはできないと思うんですけど、ある程度はやりたいとは思っていますけれど。食事作るのもそんな嫌いじゃないし。ただ、やっぱり、皿洗うのは嫌いなんです。そういうのとかは、ちょっと手伝ってもらえればなとかいうのはあります。」(25歳)

「…できればやっぱり、夕飯も、たまに交代交代でしてくれるとか、もしくは、自分が作ってもいいですけど、後かたづけをしてくれるとか、そういうふうな人がいればなと思います…」(鶴岡 27歳)

しかし、こう語った彼女も、好きになった人が必ずしも分担してくれる人とは限らないので、あとは話し合いで、と考えている。

30代の女性の家事分担のイメージは、さらに「寛大」である。逆に、半々とするとかえって負担になる、と思っている。

「今、現実的に、自分と真っ二つにシェアしてくれる人というのは、イメージとして割と少ないような気がするんで、だから、もしも私が仕事も結婚も両立させてやっている場合、一応そのことを分かってくれば、ある程度、へまをしようが手抜きをしようが、大目に見てくれればそれでいいかなと。」(32歳)

「私もあなたも働いているから、じゃあ、家事は50%ずつ必ずやらなくちゃいけないとか、そうすると、かえって生活も苦しくなって、堅苦しいし、かえって負担がかかりますよね。私は50%やっているのに、あの人はこっちの50%をやらないとか。そういうほうですごいストレスが溜まると思うんですよ。何かそういうのを、大変なんだなということを知ってほしい」

のと、あとは、ある程度やっぱり自分もやろうという、そういう気持ちがあればいいんじゃないかと思うんです。「…ただ、男の人って、女の人は割と何でも細かいことはやってくれるものだと頭から思い込む人が多いから、それは難しいかなと思いますけれど、社会で 50%にすべきだとか、そういうことよりも、その夫婦の話し合いで、それぞれの場合に対応した話し合いをできるような夫婦になるのが一番理想的ですよ。」(33 歳)

このように、今回インタビューした女性達は、男性が認識しているのとは対照的に、自分の結婚生活では、家事は半々に分担したい、と思っている人はいなかった。家事分担について、男性が認識している女性の考え方と、女性の考え方の間にギャップがあるのだ。女性は、半々に分担することは望んでいないとはいえ、本来ならそうしたいが、それは無理だから、始めから期待しない、という部分もあるのだろう。男性側は、家事負担を期待されていることが、結婚回避に結びついているようである。ジェンダー規範が変化しつつある一方で、理由はさておいて、男性が女性と同じくらい家事をすることが難しい現実の中で、男女とも、どのような関係を基準にしていいのかわからない状態にあるのだろう。

## E. 友人・親の夫妻関係が結婚観と結婚コスト感に及ぼす影響

結婚についての考え方やコスト感は、自分の両親や周りの友人の結婚のありかたにも、かなり左右されている。当たり前のことのようであるが、同僚、上司、友人、両親の結婚の状態を通して、結婚にポジティブなイメージを持つ人は、結婚に乗り気である。逆に、否定的なイメージを持つ場合は、必ずしも結婚したくなくなる、ということではなく、影響はやや複雑である。(「概念図では、夫妻関係の実態—疑似体験」は、結婚コスト感の一部として扱ったが、インタビューで、コスト感を持つ要因のかなり大きなウエイトをしめていることが明らかになったので、ここでは、別項目扱いにする。)

### 1. 友人や知人の結婚関係の影響

まず、友人や知人の結婚の影響を見てみよう。

「私は、いい相手がいたら早く結婚をしたいというのは、周りを見ていても、結婚したら大変になったという人はいないんですね。結婚をしても、その人らしさを失わないまま働き続けている例があるので、あんなふうに普通だったら自分も結婚したいなって。それは、一緒に誰かいたほうがいいんじゃないかと思うので。」(31 歳)

彼女の場合、周りの結婚を見た限り、女性も自分が変わらないで済んでいる、ということが、結婚への意欲を高めている。逆に、周りの結婚した人が苦勞していたり、幸せそうでない場合は、結婚を否定的に捉え、結婚への意欲も低くなる。例えば、鶴岡の 22 歳の女性はこう語る。

「友達とか、子どもができて結婚した子と違って結構多いんです。そうやって、「子どもかわいいし、いいじゃん」みたいな感じで言うと、「いや、結婚は人生の墓場だ」とか言って。…結婚なんか、自由時間もなくなるし、旦那も、年が近い人と結婚をしたりとかすると、相手にしてもらえないとか、結構多いんです。…人生の墓場って。しなきゃよかったって。」(鶴岡 22 歳)

彼女は、アンケートでは、「いずれ結婚するつもり」と答えてはいたものの、話の節々

から、結婚に対して暗いイメージを持っており、付き合っている男性はいるが、結婚となると、とても消極的であった。

男性は、結婚している友人や知人を、おもしろくない、つまらなそうだと感じ、結婚している人を全くうらやましいと思わず、独身の方が断然得、と考えるようである。

「…結婚をした人とか見ても、周りに、結構年いっている人も結婚している人、少ないんですけども、結婚している人を見ると、つまらなそうなので。」(男性)

「おもしろくないというか、例えば、「娘さんどうですか」なんて振ろうものなら、娘の話、例えば飲み会とかに行き、何か話することないなど。バイト先なんですけれど、「娘さんは、最近」、「いや、あのね」なんて始まったら、もう一晩中というような。そういうのを聞かされるのは、「それは、あんた、自分の娘がかわいいのはよく分かった」と。「だけど、俺の娘じゃないし」。ひどいのは、デジカメか何かで娘の写真を、「これはね」とか持ち出して見せるやつとか。「分かった。もういい」とかというふうには。あと、最近も、ひな祭りありましたよね。「いやー、きょうは娘のために」、こんなちっちゃいケーキか何かを用意して、そそくさと帰っていったりするのを見ると、たぶんそれはそれで幸せなんだろうなと思うんですが、どうも、やっぱりおもしろくないというか、おもしろくないという変ですけども、ちょっとそういうのをまねしたいとか、僕もそういうふうには早く娘のために帰りたいとはやっぱり思わないという、そういう印象はどうしても持ちますね。」(男性)

「うらやましいとは思わないですね。なりたくはないですね。仮に結婚して家庭を持つならば、そうならないように努めます。」(男性)

「バイト先、塾なんですけれども、塾で、40代ぐらいに近い人でも、ヤクザな生き方をしながら生きていて、すごい楽しそうとか、すごいよく勉強をして、遊んで、いろんな経験も豊富でというのと、あと、音楽のほうをやっているんですけども、その世界でも職人的に結婚をしないでやっている人も多いから、こういう生き方もというか、…生きていけるんだというか、こっちのほうが断然得だぞというか。」(男性)

このように、20代の独身男性の目に移る既婚の男性は「おもしろくなく」、逆に、年上の独身男性はカッコいい、というイメージがあるようである。そのため、自分達もあまり結婚に乗り気になれないのだろう。

## 2. 親の夫妻関係の影響

周りの夫妻関係でも、特に、親の結婚のありかたの影響は強いと言える。この影響も、単純なものではなく、夫妻関係がよい家で育った場合は、子どもは結婚を肯定的に見るが、悪い場合は、必ずしも否定的になる、ということではない。両親の関係を肯定的に評価しない場合は、「両親のようになりたくない」、「父親のような人では困る」、というように、反面教師として見ている。しかし、それとは違った関係を築くにはどうしたらいいのか、というのが見えず、結婚に対して積極的になれない、という解釈もできる。

まず、両親が(ある程度)仲がいいと、結婚のイメージも肯定的で、自分も親のような結婚生活をしたと思う例を挙げる。

「うちの両親はすごく仲がいいので。自営業だったものですから、いつも一緒にずっと一緒にいたわけですね、それはすごいやっぱり理想的だなって思いますね。そういうふうにはいつも一緒にいても仲よくて、ケンカもそんなにしないし、お互いに尊重し合っているところがあった

ので、それはすごい理想的な夫婦なので。ですから、人間関係だけ見れば、そういうふうについて一緒にいても仲いいというのは、いいなと思って、そういう関係の結婚生活をしたいなと思います。」(33歳)

「うちも仲はいいんですけど、父親が、私が小さい時は仕事が忙しくて、夕食とかは一緒にあまり食べていなかったんですよ。母親は専業主婦なので、習い事とかに行っていましたけれど、父親も仕事の虫なので、お互いにそれぞれ共通の趣味とかあったらいいんじゃないかなと思いますけれどもね。今は一緒に旅行に行ったりしているみたいです。」彼女は、自分が結婚するときは、そういうことも大事にしたい、とのことである。(30歳)

「うちの父母は普通に見合結婚をして、あまり仲のよくなかった時期もあって、そういう時というのは、母親は、「お見合いはよくないから恋愛結婚をなさい」と言っていたんですけども、最近、年をとると仲良くなっていったのかな、夫婦っていいなと思って。(31歳)

逆に、親の結婚を幸せそうでないと感じ、結婚への意欲が弱くなっている場合を見てみよう。

「…全然仲が悪いんですけども、その緩衝材を買って出たので。親も、子どものためみたいなことで、自分たちの夫婦の問題は置いといてみたいなので、いい加減、20歳を過ぎてそんなのやられてられないので、もう勘弁してくれという感じで。あと、さっきの結婚のほうに戻っちゃうんですけど、親が結婚しているのを見て全然幸せそうじゃないので、別に、何のために結婚したのというか、形だけ守るような感じで、「それで幸せ」って聞きたいような感じなので、それはすごい大きいですね。全然幸せそうじゃないので。」(男性)

彼は、結婚する気はなく、また、知人の結婚生活についても、つまらないと否定的に見ている。そして、アンケートでも、「一生結婚するつもりはない」と回答し、インタビューでもそのように語っていた。彼の場合は、両親の仲のよくない関係が、彼の結婚観に直接的に影響している例であろう。

親の夫妻関係の質がどうであるかに加え、役割分担のありかたも、独身の女性が理想とする、あるいは、逆に避けたいと思う役割関係に影響している。

20代の女性のひとは、役割分担がはっきりしていない自分の両親のような関係が理想だと考えている。

「うち、全然両親の役割分担がはっきりしていないので、うちの父は何でもする人ですよ。母が、ついこのあいだまで仕事をしていたので、夕飯は父が作るというのが決まっていたので、父がいない時は、みんなは夕飯をそれぞれに食べてくるようにと、朝、宣言されるわけです。だから、ずっとそういう生活で、それが理想ですね」(27歳)

反対に、父親は外で働き、母親は主婦という家に育った女性たちは、そのようにはなりたくないと考えている。しかし、それと同時に、そういう形しか知らないのも、複雑な気持ちであることも伺える。

「うちの親なんかはとても古い感じの人なので、お見合結婚で結婚して、普通の、お父さんは仕事をして、お母さんは主婦をやっているという、そういう感じで、どっちかというところ、うちの父とかはすごく頭が古いの、家長制度みたいな、そういうのが頭にあるような人なので、そういう意味でいえば、反面教師という感じで、私は、あまり古い感じの頭を持った人は困るなというふうには思いますけれどもね。」(32歳)

「割と父親は何もしないので、本当に何もしないので。(やっぱり自分の結婚生活は、) できれ

ばなりたくないです。できればなりたくないんだけど、反面、ずっとそれを見ているから、「そうじゃなきゃいけないのかな」というような気持ちもあるというような、ちょっと微妙な感じなんですけれど。理想は本当はそうなのかなとかいう。だから、これは間違っているのかなという気持ちもあるんですけど、でも、自分では絶対できないというのが、もう分かっているの。」(25歳)

「私も、…と同じような、典型的な昭和一桁なんですけれど、父が仕事、母は専業主婦で、お見合結婚です。夫婦仲は、本人たちは悪いと言っているんですが、けんかがどうもコミュニケーションだということが長年かけて分かりまして、やっぱり年をとると仲よくなるという、夫婦ってそういうものなんだなというのは、よく見ていて感じます。割れ鍋に閉じ蓋から出てきた壊れ物というのが私というふうには、3人家族なんですけれど。夫婦像は、私はそういうのを見て育ってしまっているの、例えば、奥さんもちゃんと働いて、旦那さんと対等というのは、さっきちょっと話した子育てをしながら仕事をしている友だちの両親はそういうタイプなんです。お互いに話していて、親のタイプが自分の夫婦観にすごく影響しているなどは感じましたね。何だかんだ言って、私は、進歩的じゃなくて、実は古風なイメージを持っているので、自分の仕事が忙しいと、妻の姿が、絶対に理想は達成できないからというので二の足を踏んでいるところも実はあるんじゃないかなと、最近では自分では思っています。」(38歳)

これらの言葉は、多くの20代、30代の女性の状況を表しているのではないだろうか。自分の育った家では、父親が仕事、母親は家を守る形の性役割分業で成り立っていたが、規範も変わりつつあり、自分自身の意識も、そのような役割分業をそのまま受け入れることができない。しかし、「夫は仕事・妻は家庭モデル」を拒否した場合、具体的にどのような男女関係を作って行ったらいいのか想像できないことも、結婚はしたいとは思いつつも、それほど積極的になっていないことに関わっていると考えられる。

これらの言葉から、親の夫妻関係が子どもの結婚観に及ぼす影響は、親の夫妻関係がよくないと、子どもの結婚意欲が弱くなる、という単純な関係ではなく、よい関係でない場合は、多少踏みとどまってしまう、あるいは迷いがでてしまう、という影響があるようだ。さらに、夫妻間の役割分業についても、父が仕事、母が専業主婦の家庭で育った女性は、自分はそうしたくないと思いつつも、逆にそうでなければいけないのではないかという気持ちもあり、そこでまた迷いが生じる、というやや複雑な影響として現れている。

#### F. 自分の結婚が親や家族に与える影響、というコスト

今回のインタビューでは、特に男性が、自分が結婚した後、親の関係がどうなるのか、という不安を持っていることがわかった。上記Eは、親の関係のありかたが結婚に関する意識に影響し、結婚回避を生み出している、ということであったが、インタビューで、親の夫妻関係の影響は、別の形でも現れることが分かった。子どもが親の関係を気遣い、自分が家になくなると、二人の関係はどうなるのか、という不安が、結婚へのプッシュを弱くしているケースがいくつか見られる。このような不安は男性に多く見られた。

「うちは、僕が出て、妹が出てとなった時に、うちの父母が2人で平和な生活を送れるのかどうかというのが。母親が相当というか、冗談めかしてはいるけれど、やっぱり相当嫌がっているの。…(子どもが)2人いるから気も紛れるし、緩衝材に子どもがなる場合もあるし、こっちのほうを向いて母親の悪口を言ったりとか、こっちのほうを向いて父親の悪口を言ったりとか、そんなことは日常的なことなので、あの2人きりで家に残すとすると、どういうことが起きるのかなと。」(男性)

「…うちもやっぱり、僕と妹が出ていってしまえば、〇〇家と同じような状況じゃないかなと。非常に陰悪なムードですし、うちの父はまだ働いていますけれど、あと数年で定年したら、

「何か最近、定年後に離婚するというパターンが増えているらしいよね」とか、うちの母ちゃんも言っていますし。うちの母親というのは結構あちこち外へ出て行って、友だちも多いですし、アクティブなほうなので、そうなったらそうなったで、いいかなとも思いますし、うちの親父はどうなっちゃうのか知りませんが、ただ、将来、病気になっちゃったとかいって面倒をみるという時のことは、はっきり言って、僕はそれは全然避けて、考えないようにしてしまっています。せいぜい、あまり惚けてしまったりしないように、積極的に趣味を、好きなことをやれと。うちの母親は結構外へ出ていきますけれども。うちの父親もマイペースで趣味があるから、何とかかなりそうな気がするんですけど。あまり、実は、将来の家を含めたことというのは考えていないし、考えたくない。わざと避けているような気がします。」(男性)

また、家の経済面を考えている男性もいる。

「うちなんかだと、今の時点だと、うちは、父がもう定年退職で、今のところは嘱託で経理関係の仕事をしているので、それのついで、今度 65 で、60 で定年を迎えて、65 まで嘱託で同じところに働いていて、その経理関係のついで、今度はまた別の会社の経理部みたいなところに転職して、アルバイトという感じにいるんですけど、収入が、本当にフルで働いていた時よりもすごく減っていますし、年金をもらっているんですけども、年金と足しても、やっぱり一番高かった頃の年収には全然及ばない。妹が、今、まだ大学 2 年生で。…だからやっぱり、バラバラで暮らしちゃうと、それぞれにロスが、金銭的にロスがあると思うんですよ。それぞれが、例えば、僕が独り暮らしして、妹も独り暮らしすると。そうするとやっぱり、僕もアルバイトをして、奨学金も一応借りていてというようなものを、妹も今、奨学金を借りているんですけども、それを固めたほうが効率的というか。…少ないお金は固めたほうがいいだろうということで、そういうこともあって、今のところは、そういうこともあって同居しているというのがありますから…」(男性)

彼らとは対照的に、自分の結婚が決まっている男性は、こう語る。

「うちはあまりギスギスしたところはない。…うちは、退職したからって離婚するような感じはない。…そんなに仲が悪いというのはないですね。今までもずっとなかったし。両親の老後となると…2人で放っておいて大丈夫だ。」(男性)

彼の場合、両親の関係のことは心配せずに、自分の結婚のことを考えられたようである。

女性では、関係が壊れるのではないかと、との不安を語った人はいなかったが、自分が出てしまうと、母親の生きがいなくなるのでは、と思っている人もいる。

「(姉は)結婚はしていないんですけど、うちを出て、職場の近くに住んでいるんですけども。それもあって、両親とも、すごい世話好きなので、たぶん私がいなくなったら寂しがるだろうなと思います。それに甘えて家にいちゃってるんですけども。…うちも「自立しなさい」と口では言うんだけど、でもやっぱり、世話をできる子どもがいたほうがいいのかという雰囲気はすごい醸し出している。…やっぱり母親は専業主婦で、子どもを立派に育てるといのが人生の最大の目標みたいな感じで、だから、一応子どもがきちんとした学校に入って、就職もちゃんとして、それでちゃんとした結婚をして、結婚式をすごい盛大にやって、そう終わりたいんだろうけれども、それでなくなっちゃったら、世話する相手がなくなっちゃうから、たぶん生きがいなくなっちゃうんじゃないかなと思うんです。」(25 歳)

これらの家庭の共通点は、子どもがいるから、なんとかつながっている夫妻关系なので、独身の子どもの立場にすると、自分が出たらすぐに別れるのではないかと、あるいは、生き甲斐がなくなるのではないかと、という不安を感じさせてしまうことである。そのことが直接の要因として作用し、結婚を回避するのではないが、結婚したいと思いつつも、今の

ままでいることに貢献している可能性はあるだろう。

#### IV. まとめ

今回インタビューした計 16 人の女性の大半は、いずれは結婚したい、あるいは生活を共にする人が欲しいと考えている。そして、ある年齢が来たから、家族に言われたからなどの理由ではなく、自分で選択して結婚したいとの気持ちが強い。女性が結婚したいのは、パートナーが欲しいからであり、対等に話し合えるパートナーとしての結婚相手を求めている。結婚する場合の条件としては、今のままの自分でいられ、今のままの生活（仕事など）が続けられることが重視されていた。メディアなどでは、女性が高望みしすぎだから結婚できないのだ、とも言われているが、私達のインタビューした女性達は、人間として対等な立場で話し合いのできるパートナー、という「当たり前のこと」を求めているだけである。家事分担にしても、どんな状況にある男性にも半々を要求しようとの考えも全く見られなかった。結婚に対する考え方は、首都圏の女性と鶴岡の女性の間には特に違いがみられなかった。

5人の男性の方は、結婚への積極的な意欲は見られず、成り行き任せという面がある。結婚や結婚相手にも具体的なイメージを持っておらず、女性が「最初から自分の結婚のコンセプトみたいなものを決めている」ことに反発を感じている人もいる。しかし、積極的に独身を選んでいる、というのでもない。

インタビューでも語られていたように、これまでは、女性は経済的に一人立ちできず、結婚していないことへの偏見も強く、選択の余地のないまま結婚していたケースが多かったが、彼女たちが独身でいられるのは、そのようなしがらみから解放されたからであり、その意味では、晩婚化・非婚化は、ポジティブに捉えることができる。しかし、別の角度から見れば、結婚制度を拒否したり、積極的に独身という生き方を選んだのではないにも関わらず、「高望み」しているのではないにも関わらず、独身でいるのは、今までの「結婚関係」のあり方と、それをとりまく社会制度の犠牲になっているからだ、と言える。

独身の男女が抱えている「自分が結婚して家を出てしまうと親の結婚に影響を与えてしまう」という不安や「母親は専業主婦としてしっかりやってきたが、自分を持つことができなかつたため、自分が結婚して家を出てしまうと生き甲斐がなくなるのでは」、という不安は、まさに、今までの結婚のあり方とその根本にあるジェンダーシステムの問題である。

独身の人は、今までの「結婚」をみていて、女性は結婚してしまうと、自分のやりたいことができなくなるから、との焦りと、結婚前にしっかりと身を立てておけば、結婚してもなんとかそれを続けていけるだろう、との希望から、自己実現を優先させていることも、女性の人生を犠牲にしてきた今までの結婚のありかたの問題であろう。

男性は、経済的な責任を感じているため、とにかく身を立てないことには、結婚や子どもなど考えられないことを強調していた。男性が家計を支え、女性が家の中を守るというカップル関係の規範はすこしづつ崩れ、実際に不可能になりつつある。しかし、まずは気の合うパートナーを見つけ、その後、自己実現にしても、経済的安定にしても、カップルとしての生活を築いていく、という考えは、ほとんど見受けられなかった。つまり、今までの結婚のあり方の規範は崩れつつあるものの、それに代わる新しい関係の形が確立され



ていないのである。そのような無規範の状態に置かれている男女が結婚していない、と言えるだろう。

家事分担については、女性の意識、女性が観察する・考える男性の意識、男性の意識、男性が観察する・想像する女性の意識の間にギャップが観察された。個々の人の中でも、自分が育った家の夫婦（親）と、今後自分が取るだろう・取りたい関係の形の間にギャップがみられ、どうしたらいいのかわからない、あるいは、パートナーシップ的な関係を作りたいとの理想を持っていても、それをどのように実現できるのかのイメージが沸かない、という感じである。

親の介護に対する不安も、結婚する・しないを決める重要な点となっていることがわかった。実際に、結婚したい意志があり、具体的な話しも進んでいたにも関わらず、相手の親の介護の問題がからみ、結婚しなかった、という女性の例もあった。男性は、結婚してもしなくても、自分の親の面倒をみることは視野に入れているが、結婚した場合、女性の親の面倒をどうするか、ということは考えていない。2, 3人のきょうだいで育った世代では、男女に関わらず、大半の子どもが親の面倒のことを気に掛けなければならないので、この男女間のギャップも今後ますます問題になってくるのではないだろうか。自分の人生を犠牲にしなくても親の面倒をみることができるような社会の制度をきちんと作っていくことも望まれる。

このように、自分が結婚して家を出ることに伴う不安、自己実現を優先すること、経済的安定なしでは結婚を考えないこと、家事分担の負担感、分担についての男女の考えのギャップ、親の面倒をみることの負担感を持っていることは、みな、それぞれ違う次元ではあるが、いままでの結婚のあり方の問題点を浮き彫りにしている。独身の男女が、それを意識しているかどうかは別にして、結婚しないことによって、今までの結婚のありかたとそれに根付くジェンダーシステムを受け入れないのは、長い目で見れば、抑圧的なジェンダー関係を壊し、よりよい社会にするための一歩であろう。

一世代前の結婚については、今さらどうすることもできないが、これから結婚する人が、本当の意味でそれを選択し、創造的によい関係を築いていくケースが増えていけば、結婚をポジティブなものとして次世代へ受け継ぐことができるのではないだろうか。それは、結婚しない者を差別したり、結婚へのプレッシャーの増幅などによって、結婚しないでいることのコストをあげることではない。結婚という形式にとらわれず、多様な関係性が同等に認められるような社会になった上で、あえて「結婚」を選んだ人達の幸福感によってしか、よいイメージを作ることはできないだろう。インタビューでは、自分自身は結婚したいと思っている女性達でさえ、結婚する・しない、専業主婦になる・ならない、キャリアを持つ・持たないなど、どの生き方を選んでもそれを支えることのできる社会になって欲しい、また、夫婦別姓を選べるようにする、結婚しなくても子どもが持てるようにする、男女、あるいは結婚に限らず、パートナー関係を作れるようにするなど、いろいろな生き方それぞれに価値があるのだから、それらが実現できるような社会になって欲しい、と語っていたのが印象的である。

## 7. 男性の家庭内役割とジェンダーシステム —夫の家事・育児行動を規定する要因について—

西岡 八郎

### 1. はじめに

先頃、人口問題審議会は少子化、人口減少社会に関する基本的な考え方をまとめた(『少子化に関する基本的考え方について』)。この報告書では、少子化の主たる要因と背景について、以下のように整理している。固定的な雇用慣行、性別役割分業型社会、働く女性のニーズに応じた子育て支援の欠如などが、女性に仕事か家庭かの選択を迫り、結婚をためらわせている。こうした要因によって、若い女性にとっては結婚や出産・子育てが義務や負担感の強いものになっている。その結果、結婚しない女性が増え、未婚率が上昇、少子化が進んだとしている。論点の一つは、家庭内の性別役割にとどまらない、社会の多くの面で制度として具体化されているといってもよい性別役割型社会の変革を提言していることであり、多少迂遠であっても、こうした変革が少子化への対応策となりうるという考え方である。

本報告の目的は、家庭の共同責任を担う夫の家事、育児遂行を検討することによって、少子化と家庭内外の社会や制度の問題を考える一助とすることである。男性の家事や育児協力の少なさが、女子の結婚や出産・子育てを躊躇させる要因、あるいは負担感の一つになっていると考えられ、男性の家事、育児参加への促進要因や阻害要因を研究することは、少子化とジェンダーの問題を考える上で重要な研究課題といえる。この報告では、個票データを用いて夫の家事、育児行動を規定する要因について考え、何らかの提言へと結びつけたい。

### 2. 問題の設定

アメリカでは、夫婦の家事分担、家事に関する不公平感の研究などについて、家族社会学の領域を中心に進んでいる。NSFH(National Survey of Families and Households)調査などをはじめとして全国スケールの個票データに依拠した分析は数多くある。しかし、日本における夫の家事や育児遂行に関する先行研究は、家政学、家族社会学を中心に地域的、あるいは少サンプルの事例調査などに限定されていた。全国規模の実態調査は、生活行動に関する調査が定期的に行われている(総務庁「社会生活基本調査」、NHK「生活時間調査」など)。しかし、調査の性格上公共データの利用に制限があり、これらの調査の個票データを用いた研究はそれほど多くはない。

従来家族研究では、家庭内の役割配分を規定する要因として、社会規範論(イデオロギー論)、相対的資源論、時間制約論などが有力な説明仮説として用いられてきた。しかし、日本では上述の理由で全国規模のサンプルでこれらの変数の妥当性を総合的に検討した実証研究はほとんどみられない。そこで、本報告では夫の家事や育児遂行について、われわれが行った全国調査を用い、先行研究では個々に分析されてきた仮説を総合して検証を試みる。また、夫婦間、あるいは家族の問題を超えた社会の持つ構造的な問題が夫の家事、育児への役割遂行を制約しているのではないかと、との考えから日本の社会や家族に

特徴的な要因として「環境制約」仮説を新たに設けこれについて検証をする。さらに、家事や子育ては実際の生活の場で生起する問題であるから支援するネットワークの存在が直接影響してくることが想定される。これを「サポート資源活用」仮説として検証しようと思う。

まず、社会規範論の妥当性については以下のような方法を用いて検証する。規範への同調性の高い社会では、役割は規範によって決まる部分が多い。ここでは、妻が持っている社会規範の内面化としての性別役割意識の度合いが夫の家庭内役割にどのような影響をもつかを検討する。これは妻の性別役割観が強いほど夫の家庭内役割に否定的で、夫の家事、育児遂行の少なさを肯定する、その結果夫は家事、育児遂行をあまり行わないことになる。すなわち妻のジェンダー役割の肯定が夫の家庭内役割の遂行にも影響を与え、夫の家事や育児遂行の阻害要因となる、という仮説を立てて検証する。

つぎに、夫妻の資源についてはそれぞれの社会経済的な属性による分析を行うが、資源の相対的な分布の差が夫の家庭内役割に影響をもつのではないかと、という仮説である。夫婦の資源分布が家庭内役割配分に決定的な要因となる、そういう意味では状況適合的で、合理的な仮説である。すなわち夫の収入が妻より多い、収入格差が大きいほど、夫の家庭内役割は小さくなる、逆に女性の資源が拡大するほど夫の家事遂行を促進する正の効果をもたらす夫の家庭内役割配分は増すと推測できる。夫婦間の経済的な勢力関係がジェンダー役割を規定する要因になるとの考えによる。この報告では、教育歴や職種・従業上の地位などに関する変数は社会経済的な変数として扱い、夫婦間の収入格差を独立させて相対的資源分布仮説を検証する。

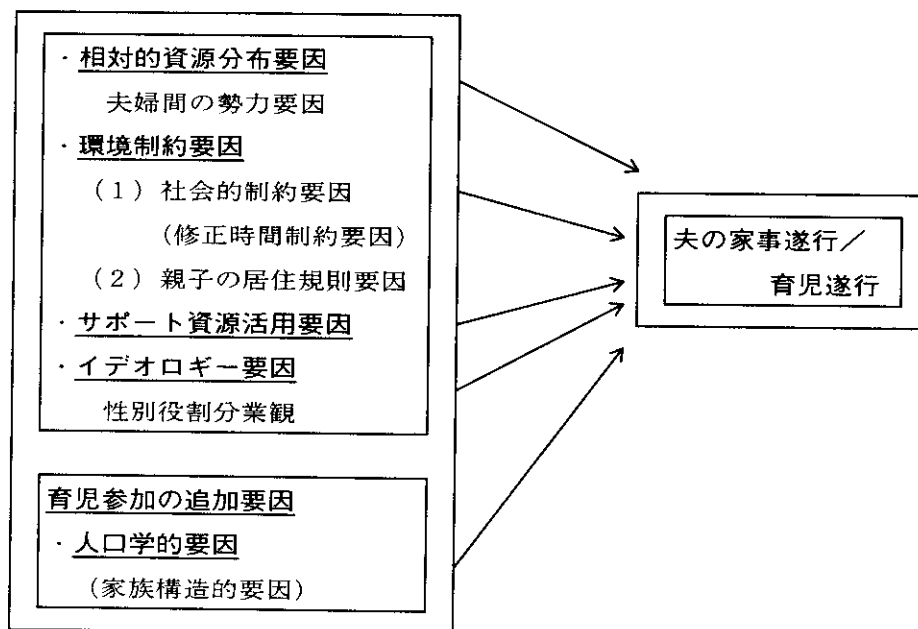
また、上記の従来の先行研究による規定要因に加えて、夫婦間、あるいは家族の問題を超えた社会的な制約、すなわち社会の構造的な問題が夫の家事、育児への参加を制約しているのではないかと、という考えから、これを「環境制約」仮説と称び、変数として加えた。従来の研究でも労働時間、就業形態などの変数を用いて時間制約論の立場から研究が行われている。形式的には時間制約論の修正的な変数であるが、日本の夫の家事行動や育児行動を考える際に、単に時間制約論だけではない、従来の仮説の枠組みだけでは説明し難い社会的な要件が介在しているのではないかと理由から「環境制約」論とした。生活行動面で見ると日本の特徴は、長時間労働と男性の家事労働の少なさの2点に集約できる。これは個人の時間が会社（あるいは所属組織）の時間体系に従属していることの結果と置き換えることもできる。夫の家事遂行を考える場合、現代社会の時間秩序が組織優先で、個人の時間が社会の時間体系のなかで位置づけられているとすれば、夫個人の持つ属性の条件よりも社会的な制約条件が優先的關係に位置すると思われる。そこで、家族を取り巻く外社会の環境制約要因が夫の家庭内行動にどのような影響を与えているのか、具体的には、社会的な制約、すなわち社会の構造的な問題を集約する指標として、ここでは個人レベルでは単に労働時間を変数とするのではなく、夫の帰宅時間、通勤時間に置き換え、こうした外生的要因について分析する。なかでも帰宅時間は、日本的な特徴でもある就業時間に加えて残業や会社関係の付き合い時間を包括しており、企業中心社会の時間秩序をもっとも典型的に示す指標といえる。具体的には、帰宅時間の如何に関わらず夫の家事、育児行動に有意な影響がみられなければ制度的な要因に関わりない、他の要因によって影響を受けることになる。しかし、逆の場合は、夫の家庭内役割遂行の阻害要因になっていると考え

られる。また、環境による制約要因には、日本的な特徴である「親との同居」要因を含むことにする。本来親との同居は社会制度の不備を補完する機能（保育所、ベビーシッターなどの現物給付の代替機能）の役割を果たしてきた。しかし、親との同居は夫の家事、育児遂行の役割を補完する一方で阻害する要因として作用する側面を持っていると考えられる。こうした関係は表裏一体の関係でもあるが、親との同居条件が夫の家事、育児遂行にもたらす影響は負の効果をもたらす、すなわち親によって夫の家庭内役割が代行され、夫自身の家事や育児への遂行率を低下させている可能性が大きい。

環境制約要因とも関連するが、手段として利用可能であることと、実際にサポート資源として活用していることを区別するために、相談相手としてのサポート、手助けに関するサポート数を変数化して投入している。サポート活用が大きければ、そのネットワークに頼ることによって夫の家事参加は小さくなるはずである。これをサポート資源活用要因による夫の家事参加の通減要因として位置づけておきたい。

以上のような手続きで、男性の家事、育児参加への促進要因、阻害要因を明らかにすることによって、少子化とジェンダーの問題を考える上で何らかの政策的含意を導き出すことが可能であると考えている。

図1 夫の家事参加・育児参加の規定要因



### 3. 方法およびデータ

データは、厚生省人口問題研究所が実施した『全国家庭動向調査』の個票データを用いた（現国立社会保障人口問題研究所、1993年実施）。研究者の手によって家族・家庭を中心テーマに実施された日本で最初の本格的な全国調査であろう。調査対象は有配偶女子